

各関係機関団体の長
各病害虫防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病害虫防除所長

平成18年度病害虫発生予報第3号について

このことについて、病害虫発生予報第3号を発表したので送付します。

トピックス

イチゴ炭疽病は育苗期の防除を徹底しましょう！

イチゴの炭疽病は、雨滴やかん水等により伝染します。採苗や葉かぎの作業後、または風雨等によるすり傷等がある場合は、そこから菌が侵入しやすくなります。発病するとランナーや葉柄に黒色の陥没病斑が形成され、そこから折れたりします。またクラウン部に菌が侵入した場合、株全体が萎凋し、その後枯死します。

冷夏・長雨の年では育苗期での発病はあまりみられずに、本ば定植後に発病し被害が甚大になる場合があるので注意が必要です。



ランナーの陥没病斑



葉の病斑（汚斑）



クラウン部の褐変

(防除のポイント)

長雨や台風等の前後や、採苗、葉かぎ作業後は予防散布を行い、感染を防ぎましょう。また、葉かぎや採苗は雨天日は避けて、管理作業時によく観察して、発病株は早めに処分して下さい。

親株時から雨よけ栽培や棚式育苗を行うことにより、防除効果が高まります。

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

気温は平年並でしょう。降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並、2週目は平年並か低く、3~4週目は平年並でしょう。

要素別確率

| 要素 | 低い (少ない) | 平年並 | 高い (多い) |
|------|-------------|-----|------------|
| 気温 | 30 | 40 | 30 |
| 降水量 | 20 | 40 | 40 |
| 日照時間 | 40 | 40 | 20 |

(福岡管区気象台 18年5月26日発表抜粋)

予報第3号

向こう1ヵ月間の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

| 作物名 | 病害虫名 | 発生現況 | 発生予報 | |
|---------|--------------|-------|-------|-------|
| | | (平年比) | (平年比) | (前年比) |
| 普通期水稲 | ツマグロヨコバイ | 少 | 少 | 少 |
| | 萎縮病 | - | 少 | 並 |
| | ヒメトビウンカ | やや少 | やや少 | やや多 |
| | 縞葉枯病 | - | 多 | やや多 |
| カンキツ | 黒点病 | - | 並 | やや多 |
| | そうか病 | やや多 | やや多 | 多 |
| ナシ | 黒星病 | 多 | 多 | 多 |
| ブドウ | べと病 | 並 | 並 | 並 |
| | 黒とう病 | 少 | やや少 | やや多 |
| カキ | 炭疽病 | 並 | 並 | 多 |
| | フジコナカイガラムシ | 並 | 並 | やや少 |
| イチジク | アザミウマ類 | 少 | 少 | 少 |
| 果樹共通 | カメムシ類 | 並 | やや多 | 多 |
| 茶 | 炭疽病 | 少 | 並 | やや多 |
| | もち病 | 少 | 並 | やや多 |
| | カンザワハダニ | 少 | 少 | 少 |
| | チャノコカクモンハマキ | 並 | 並 | 少 |
| | チャノミドリヒメヨコバイ | やや少 | やや少 | 並 |
| | チャノキイロアザミウマ | 多 | やや多 | やや少 |
| イチゴ(親株) | うどんこ病 | やや少 | やや少 | やや多 |

作物別発生予報 - - 注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 水稲】

1 ツマグロヨコバイ

（ 1 ）予報の内容

発生量：平年・前年より少ない

（ 2 ）予報の根拠

5月5半旬の片振り20回すくい取り調査の結果は次のとおりである（ - ）。

ツマグロヨコバイの越冬量 畦畔 0.1頭（平年 1.0頭、前年 0.1頭）

休閑田 0頭（平年 2.7頭、前年 1.1頭）

小麦田 0頭（平年 0.2頭、前年 0頭）

（ 3 ）防除上の注意

萎縮病の常発地を除き、防除の必要はない。

2 萎縮病

（ 1 ）予報の内容

発生量：平年より少なく、前年並

（ 2 ）予報の根拠

ア ツマグロヨコバイのイネ萎縮病ウイルス保毒虫率は、前年に引き続き2年連続で0%（平年 0.2%、前年 0%）であった（詳細は平成18年度病害虫発生予報第2号参照）（ - ）。

イ 5月5半旬調査の結果、ツマグロヨコバイの越冬量は平年・前年より少なかった（ - ）。

3 ヒメトビウンカ

（ 1 ）予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年よりやや多い

（ 2 ）予報の根拠

5月5半旬の片振り20回すくい取り調査の結果は次のとおりである（ + ）。

ヒメトビウンカの越冬量 畦畔 1.5頭（平年 0.1頭、前年 0.2頭）

休閑田 0.4頭（平年 2.6頭、前年 0.3頭）

小麦田 21.2頭（平年 42.2頭、前年 5.1頭）

4 縞葉枯病

（ 1 ）予報の内容

発生量：平年より多く、前年よりやや多い

（ 2 ）予報の根拠

ア ヒメトビウンカ越冬世代の成幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は5.3%（平年 1.9%、前年 6.0%）であった（詳細は平成18年度病害虫発生予報第2号参照）（ + ）。

イ 5月5半旬調査の結果、ヒメトビウンカの越冬量は平年よりやや少なく、前年よりやや多かった（ + ）。

（ 3 ）防除上の注意

常発地域や保毒虫率が高くなっている地域では、感染防止対策として箱施薬剤を施用する。

【果樹】

1 カンキツ黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

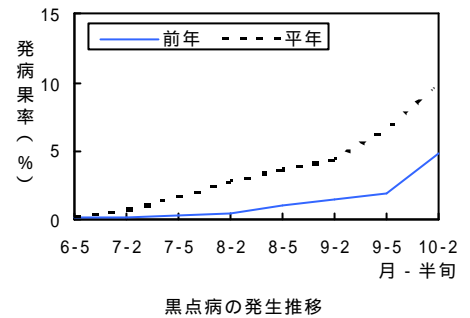
ア 前年は感染期間の4月～9月が全般的に降雨が少なかったことから、全般的に発生はやや少なかった(-)。

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(+)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる枯れ枝は除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 降雨が続くと多発するので、積算降水量250mmを散布間隔の目安に薬剤防除を徹底する。



2 カンキツそうか病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査結果は、次のとおりである(+)。

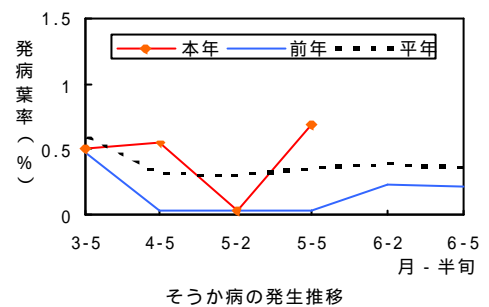
発病葉率 0.7% (平年 0.4%、前年 0.0%)

発生ほ場率 58.8% (平年 29.2%、前年 5.9%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(+)。

(3) 防除上の注意

果実では、落花直後～指頭大の時期に降雨が多いと感染・発病するので、この時期の防除を徹底する。



3 ナシ黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査結果は、次のとおりである(+)。

発病葉率 1.2% (平年 1.0%、前年 0.4%)

発生ほ場率 (発病葉) 66.7% (平年 30.6%、前年 35.7%)

発病果率 0.9% (平年 0.4%、前年 0.4%)

発生ほ場率 (発病果) 53.3% (平年 14.6%、前年 21.4%)

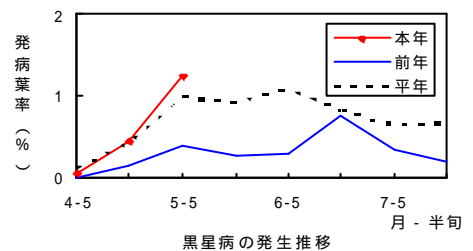
イ 各地の園地で発生が見られており、特に中山間地域での発生が多い(+)。

ウ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(+)。

(3) 防除上の注意

ア 発病葉や果実は伝染源となるので、見つけ次第取り除き焼却または埋没する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 ブドウべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査結果は、次のとおりである

(±)。

発病葉率 0.0% (平年 0.0%)

発生ほ場率 7.1% (平年 5.7%)

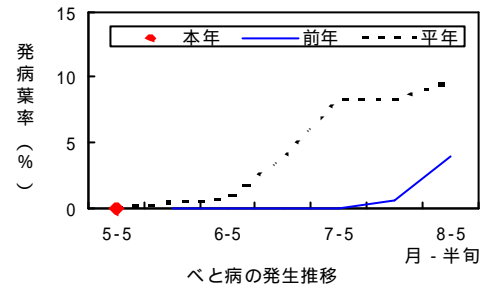
イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(+)。

(3) 防除上の注意

ア 発病後の防除は、効果が低いため予防散布を徹底する。

イ 罹病葉及び罹病果は伝染源となるので除去し、園外に持ち出し処分する。

ウ ボルドー液の散布は、降雨直後の雨滴や散布直後に降雨があると薬害が発生するので注意する。



5 ブドウ黒とう病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査結果は、次のとおりである

(-)。

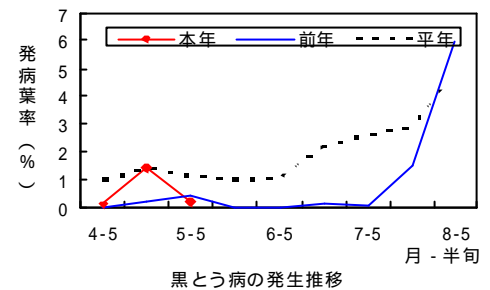
発病葉率 0.2% (平年 1.1%、前年 0.4%)

発生ほ場率 14.3% (平年 27.3%、前年 15.4%)

イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(+)。

(3) 防除上の注意

罹病葉及び罹病果は伝染源となるので除去し、園外に持ち出し処分する。



6 カキ炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査結果は、次のとおりである

(±)。

発病枝率 0.5% (平年 0.7%、前年 0.8%)

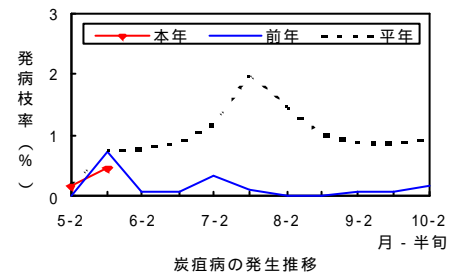
発生ほ場率 29.4% (平年 23.1%、前年 31.3%)

イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(+)。

(3) 防除上の注意

ア 罹病枝及び罹病果は伝染源となるので除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 発病枝の多い園では、降雨により感染が拡大するので薬剤散布を徹底する。



7 カキのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

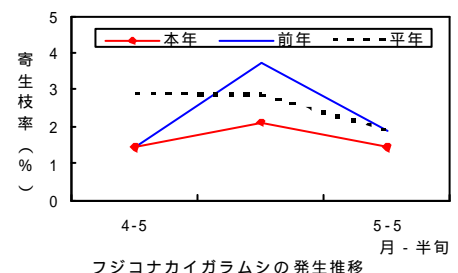
ア 5月5半旬調査結果は、次のとおりである

(±)。

寄生枝率 1.5% (平年 1.9%、前年 1.9%)

発生ほ場率 52.9% (平年 43.1%、前年 76.5%)

イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)。



(3) 防除上の注意

- ア 第1世代幼虫出現期の防除が最も効果が高いことから、6月上旬と更に約10日後に防除を行う。
- イ 本虫は、薬剤がかかり難い場所に多く寄生するので、丁寧に防除する。

8 イチジクのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬までの誘引剤の誘殺虫数は次のとおりである(-)。

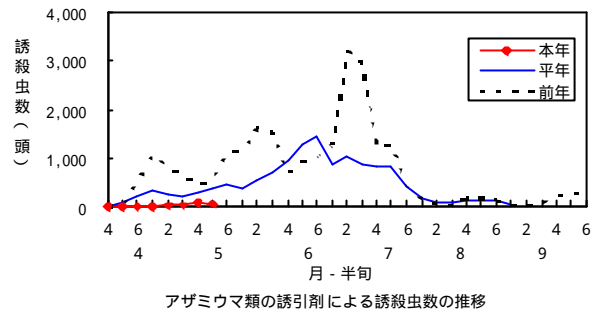
(調査地点：行橋市西泉)

203頭(平年 1,771頭、前年 4,041頭)

イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)。

(3) 防除上の注意

園地周辺の畦畔等で、6～8月に開花する雑草でも発生するので除草に努める。



アザミウマ類の誘引剤による誘殺虫数の推移

9 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年より多く、前々年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 越冬量は平均 1.8 頭(平年 1.6頭、前年 0.1頭、前々年 4.7 頭)であった(+)。

イ 5月1半旬から5月5半旬までの予察灯の誘殺虫数は次のとおりである。(±)

(調査地点：県内6か所の平均)

チャバネアオカメムシ 258頭(平年 427頭、前年 4頭、前々年 1,719頭)

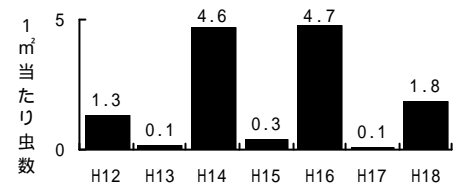
ツヤアオカメムシ 19頭(平年 158頭、前年 1頭、前々年 274頭)

ウ 5月1半旬から5月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は次のとおりである(±)。

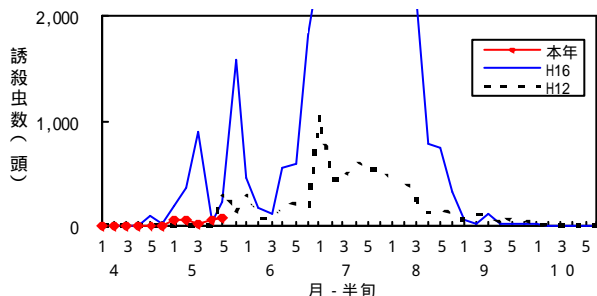
(調査地点：筑紫野市吉木)

チャバネアオカメムシ 541頭(平年 1,305頭、前年 79頭、前々年 4,158頭)

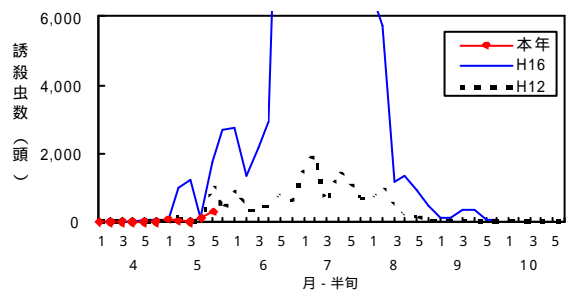
ツヤアオカメムシ 24頭(平年 299頭、前年 0頭、前々年 248頭)



チャバネアオカメムシの年次別越冬量



予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移
(県内6か所平均)



集合フェロモンにおけるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移
(筑紫野市)

エ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)。

(3) 防除上の注意

気温が上昇すると活動が活発となり、果樹園への飛来が多くなると予想されるので園内の発生状況の把握に努め、発生に応じて防除を行う。特に、ビワ、ウメ、モモ、スモモ、ナシは注意する。

【果樹・その他の病害虫】

| 作物名 病害虫名 | 発生現況 (平年比) | 発生予報 | | 防除上注意すべき事項等 |
|-----------------|---------------|-------|-------|---------------|
| | | (平年比) | (前年比) | |
| カンキツの ミカンハダニ | やや少 | やや少 | 少 | |
| アブラムシ類 | 少 | 少 | 少 | |
| ナシ アブラムシ類 | 少 | 少 | 少 | |
| ハダニ類 | 少 | 少 | 少 | |
| カキ うどんこ病 | 少 | 並 | やや多 | 罹病花卉は早急に除去する。 |
| ハマキムシ類 | | 並 | 並 | |
| 灰色かび病 | やや多 | やや多 | やや多 | |

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月2半旬調査の結果は次のとおりである(±)。

発病葉数 0葉(平年 0.2葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0%(前年 0%)

5月5半旬調査の結果は次のとおりである(±)。

発病葉数 0葉(前年 0葉)

発生ほ場率 0%(前年 0%)

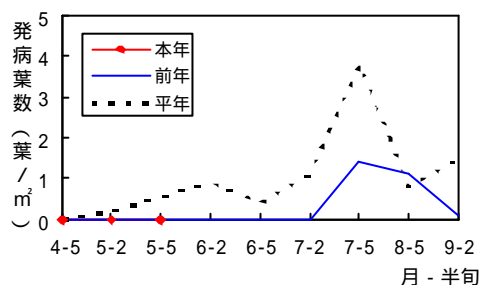
イ 向こう1ヵ月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多い(+)

(3) 防除上の注意

ア 一番茶摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに薬剤防除を実施する。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除が効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



炭疽病の発生推移

2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月2半旬調査の結果は次のとおりである(±)。

発病葉数 0葉(平年 0.2葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0%(前年 0%)

5月5半旬調査の結果は次のとおりである(±)。

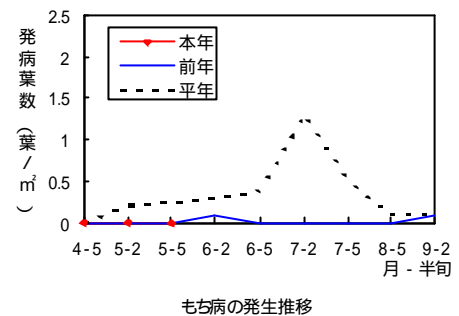
発病葉数 0葉(前年 0葉)

発生ほ場率 0%(前年 0%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並が多い(+)

(3) 防除上の注意

一番茶摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに薬剤防除を実施する。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月2半旬調査の結果は次のとおりである(-)。

寄生葉率 2.3%(平年 5.9%、前年 6.5%)

50葉当たり虫数 2.8頭(平年 15.1頭、前年 13.2頭)

発生ほ場率 36.0%(前年 61.5%)

5月5半旬調査の結果は次のとおりである(-)。

寄生葉率 2.8%(前年 11.4%)

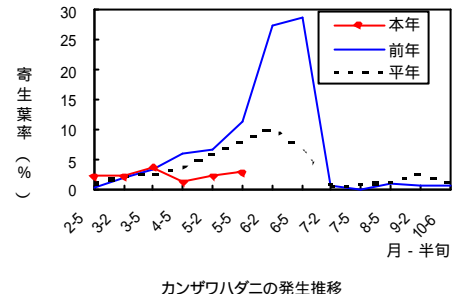
50葉当たり虫数 6.9頭(前年 43.8頭)

発生ほ場率 41.7%(前年 76.0%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並が多い(-)。

(3) 防除上の注意

発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。



4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生時期：平年・前年並

発生量：平年並、前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 越冬世代成虫の発蛾最盛期は、筑後市は5月1半旬、八女市は4月5半旬で、平年並。

イ 5月2半旬調査の結果は次のとおりである(±)。

被害葉数 0葉(平年 0.0葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0%(前年 0%)

5月5半旬調査の結果は次のとおりである(+)

被害葉数 0.2葉(前年 0葉)

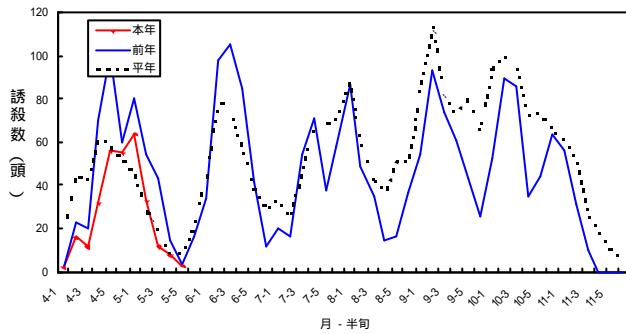
発生ほ場率 4.2%(前年 0%)

ウ 5月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は次のとおりである(±)。

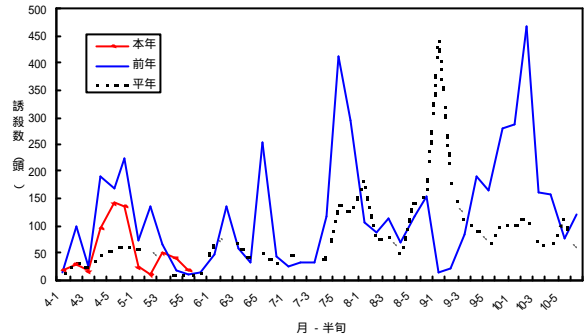
(調査地点：筑後市) 293頭(平年 389頭、前年 472頭)

(調査地点：八女市) 587頭(平年 383頭、前年 1,022頭)

エ 向こう1ヵ月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並が多い(±)。



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(堺後市)



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(八女市)

(3) 防除上の注意

- ア 第1世代成虫の発蛾最盛期は、6月中旬から下旬と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

5 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月2半旬調査の結果は次のとおりである(-)。

たたき落とし虫数 0.0頭(平年 0.2頭、前年 0.0頭)

発生ほ場率 8.0%(前年 3.8%)

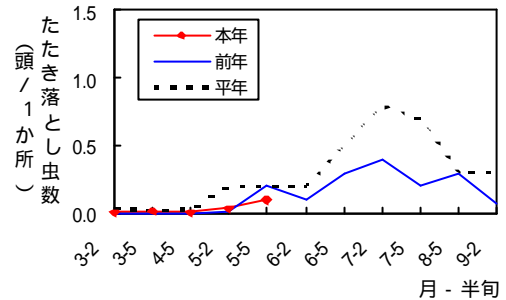
5月5半旬調査の結果は次のとおりである(-)。

たたき落とし虫数 0.1頭(前年 0.2頭)
発生ほ場率 20.8%(前年 20.0%)

イ 向こう1カ月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並が多い(±)。

(3) 防除上の注意

発生状況をよく観察し、たたき落とし(A4版白紙上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。



チャノミドリヒメヨコバイの発生推移

6 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月2半旬調査の結果は次のとおりである(-)。

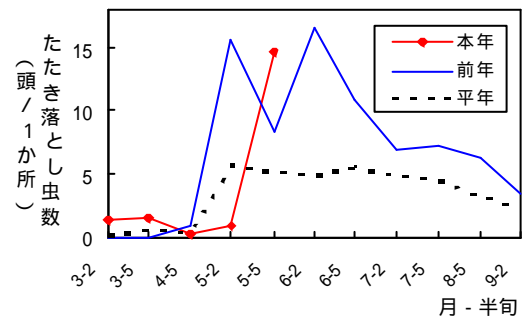
たたき落とし虫数0.9頭(平年5.6頭、前年15.6頭)

発生ほ場率 72.0%(前年84.6%)

5月5半旬調査の結果は次のとおりである(+)

たたき落とし虫数 14.7頭(前年 8.3頭)
発生ほ場率 75.0%(前年 88.0%)

イ 向こう1カ月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並が多い(±)。



チャノキイロアザミウマの発生推移

(3) 防除上の注意

発生状況をよく観察し、たたき落とし(A4版白紙上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

【野菜】

1 イチゴ(親株)のうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

5月5日半旬調査結果は、次のとおりである。

(+)

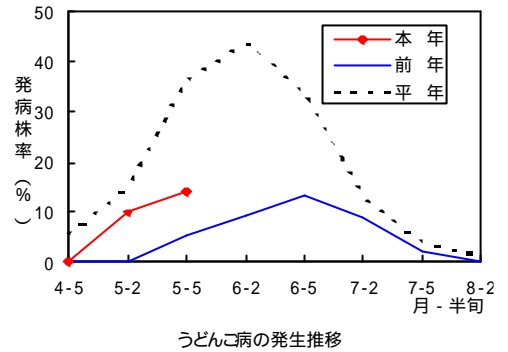
発病株率 14.0% (平年 36.1%、前年 5.3%)

(3) 防除上の注意

ア 「あまおう」は「とよのか」に比べて発生は少ない傾向であったが、今年は、前年、前々年に比べ多いので、発生状況に注意する。

イ ほ場の排水をよくし、伝染源となる枯死葉などは除去する。

ウ 親株から子苗に感染しないように、防除を徹底する。



【野菜・その他の病害虫】

| 作物名 病害虫名 | 発生現況 (平年比) | 発生予報 | | 防除上注意すべき事項等 |
|---------------|---------------|-------|-------|---|
| | | (平年比) | (前年比) | |
| ネギ ヨイモトヨウ | 並 | 並 | 並 | |
| アスパラガス 斑点病 | 少 | 並 | 並 | 5月5日半旬調査結果は寄生株率59%(平年57%、前年72%)であった。早期発見に努め、発生初期から防除する。 |
| ハダニ類 | 並 | 並 | 並 | |
| アブラムシ類 | やや少 | やや少 | やや少 | |
| アザミウマ類 | 並 | 並 | 並 | |
| 鱗翅目 | 並 | 並 | 並 | |

ポジティブリスト制度が5月29日より施行

- 農薬の適正使用、飛散防止の徹底を！ -

全ての農薬の残留基準が作物毎に設定され基準値を超えた場合は食品（農産物）の販売等が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、農薬の使用基準を厳守するとともに周辺の作物に飛散（ドリフト）しないよう、これまで以上に注意を払う必要があります。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数の使用基準を遵守する。

動力噴霧器、薬液タンクなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 生産履歴の記帳

農薬使用の際は、作物、ほ場毎、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を記帳する。

3 他作物への飛散防止対策の徹底

散布の際は、風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jppn.ne.jp